

日本出土の「非新羅系」 馬装具の系譜

大加耶圏の馬具との比較を中心に

A History of "Non-Silla-type" Horse Trappings Excavated in Japan:
a Comparison with Horse Trappings of the Dae-Gaya Federation

千賀 久

はじめに

- ①馬装具の系統の違い「新羅系」と「非新羅系」
- ②大加耶圏の馬具
- ③日本出土馬具との関わり
- ④日本にもたらされた「非新羅系」馬具

【論文要旨】

日本の古墳から出土する飾り馬用の馬装具は、その系統の違いによって「新羅系」と「非新羅系」と大きく分けられるが、その主流となるのは後者の特徴をもつ馬具である。この分類基準は、朝鮮半島の5世紀後半以降の馬具の製作地の違いを示す要素として、金斗喆氏が提示したものであり、「新羅系」馬具は主に高句麗と新羅、そして加耶の一部の馬具に見られ、「非新羅系」馬具は主に百済と加耶に集中するという傾向があるので、日本の馬装具の系譜を知る際にも有効な分類といえる。

本論では、このうち「非新羅系」馬具を取り上げて、まず、日本出土のf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の故地の候補地である大加耶圏の馬装具の変遷のなかで、同地域で馬具の改造が頻繁に行われていたことに注目した。その多くは、「新羅系」・新羅製馬具から「非新羅系」への作り替えであり、その背景には百済地域からの強い影響が考えられ、特に高句麗との戦いで百済が一時的に滅ぼされた5世紀後半には、その難を逃れた工人を受け入れたことによる大加耶圏の工房の変容を想定した。また、剣菱形杏葉が考案された地域については、韓国での百済古墳の実年代観に議論の余地を残しているが、百済の公州地域でf字形鏡板と同時に創作された可能性のほうが強いと考えた。

そして、日本列島にもたらされたf字形鏡板・剣菱形杏葉の馬装具は、百済から直接きたものと、百済製品が大加耶圏を経由してきた場合、さらに大加耶圏でそれらが模倣されたものが運ばれた場合とが想定できる。また6世紀前半には、新羅の心葉形鏡板・杏葉の馬装具が大加耶圏で改造されたものが、日本の楕円形の飾り馬具に系譜的につながると考えた。

このように、5世紀後半から6世紀前半ごろまでの日本の馬装具の系譜は、まず百済に、その後は大加耶圏に求められた。これは、当時の朝鮮半島情勢のなかで、日本列島の倭と友好関係を維持していた地域を知るうえで有効な資料となる。

はじめに

日本の初期馬具は、その多くが古墳に副葬された状態で出土し、4世紀後半・末葉から5世紀前半・中葉までの時期に、北部九州から関東の地域に点在して確認されている。それらの馬具は朝鮮半島製の鉄製轡と輪鐙などが中心であり、いずれも実用品の馬具なので金具だけがもたらされたとは考えにくく、その多くは馬に付けた状態で海を越えてきたと考えるのが自然だろう。つまり、これらの馬具の製作地を探ることは、馬とともにやってきた馬飼集団の故郷につながり、5世紀代に集中する渡来人の足跡を知る手がかりにもできる。

これらの馬具のうち、5世紀後半までの鎌轡・木心鉄板張輪鐙などは朝鮮半島南部の金海・釜山などの金官加耶圏の馬具に共通する特徴があり、5世紀後半以降に加わる鉄地金銅張りのf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の組み合わせの馬具は、大加耶圏の中心地の高霊や陝川の馬具に共通するものが見られる。このように5世紀の馬具は、加耶のなかでの馬具の変化に基本的には対応するが、その詳細については本論で検討する。

なお、この時期の馬具はそれぞれに個体差が見られ、大半は舶載品が使用されていたと考えられる状況である。そして5世紀末頃から、馬具を副葬する古墳の数が増加するとともに、地域的にも拡大するようになる。これは、列島内で馬が普及しはじめたことのあらわれであり、その背景に、牧で飼育される馬の数が順調に増加したこと、日常生活のなかで馬を利用する環境が整えられたことなどが想定でき、それに連動して、この頃から列島内での馬具生産が本格化するようになる。

さらに6世紀を通じて、鉄地金銅張りの飾り馬具の使用が続くが、舶載品の馬具がもたらされるとその模倣品が製作されるという繰り返しに終始し、列島のオリジナル品を新たに創り出すことはほとんどなかった。その間の馬具のおおまかな変遷は、次のように五つの画期に分けられるが、それぞれの時期にもたらされた舶載品の馬具の系譜を探ることによって、朝鮮半島の情勢の変化に対応していた当時の倭の外交・交易の実情を知る手がかりになるだろう。

I期 TK 23期（5世紀後半）まで：舶載品の鉄製馬具が中心。

鎌轡・木心鉄板張輪鐙

II期 TK 23・47期（5世紀後半・末）～：剣菱形杏葉を伴う飾り馬具が加わる。

f字形鏡板・剣菱形杏葉、鉄製楕円形鏡板

III期 MT 15期（6世紀前半）～：楕円形の飾り馬具が加わる。

楕円形鏡板・杏葉

IV期 TK 10期（6世紀中頃）～：鐘形・心葉形の飾り馬具が加わる。

鐘形鏡板・杏葉、心葉形鏡板・杏葉、棘葉形杏葉

V期 TK 43期（6世紀後半）～：薄肉彫りの飾り馬具が加わる。

心葉形鏡板・杏葉、花形鏡板・杏葉

①……………馬装具の系統の違い「新羅系」と「非新羅系」

日本出土の馬具の系譜を求める手がかりとして有効なのは、金斗喆氏が指摘した、朝鮮半島の製作地による馬具の特徴の違いである〔金斗喆 1993〕。金氏は5世紀後半代の大加耶と新羅の馬具を比較して、板轡の鏡板が「新羅のは立間孔が長方形になっていて、ここに連結される鉤金具の鉤の形が帯状なのに対し、加耶のは立間孔として穴を貫いて、ここに鉄棒状の鉤を通す縦長方形の鉤金具がたくさん使用される」のが特徴だと指摘した。

この鉤金具の鉤の断面形の違いは比較的容易に区別でき、しかも鏡板・杏葉ともに共通して言えることなので、この異なる特徴を「新羅系」と「非新羅系」と読みかえて、日本の飾り馬具にあてはめてみると、つぎのようになる。まず、出土例の大半を占めるのは「非新羅系」の馬具であり、さきにあげたⅡ期から主流となるf字形鏡板・剣菱形杏葉の組み合わせをはじめ、Ⅲ・Ⅳ期に舶載・製作・使用された、楕円形と鐘形などの鏡板・杏葉もこれに含まれる。それに比べて「新羅系」の特徴がみられるのは、Ⅰ期の初期馬具と、Ⅴ期の心葉形・棘葉形の馬具にはほぼ限られることがわかる。

さらに、さきの金氏の分類基準とともに、鞍金具の構造の違いに注目すると、洲浜と左右の磯金具を一体で作る鞍＝洲浜・磯一体鞍と、それらを別に作る鞍＝洲浜・磯分離鞍とに分けることができる。このうち前者の鞍は、Ⅰ期の一部の馬具とⅤ期の「新羅系」馬具に伴っていて、朝鮮半島でも新羅・高句麗の馬具に集中して見られるものである。そして後者の鞍は、「非新羅系」の馬具に対応できそうなので、これも馬具の系統の違いをあらわす要素に加えることにする。

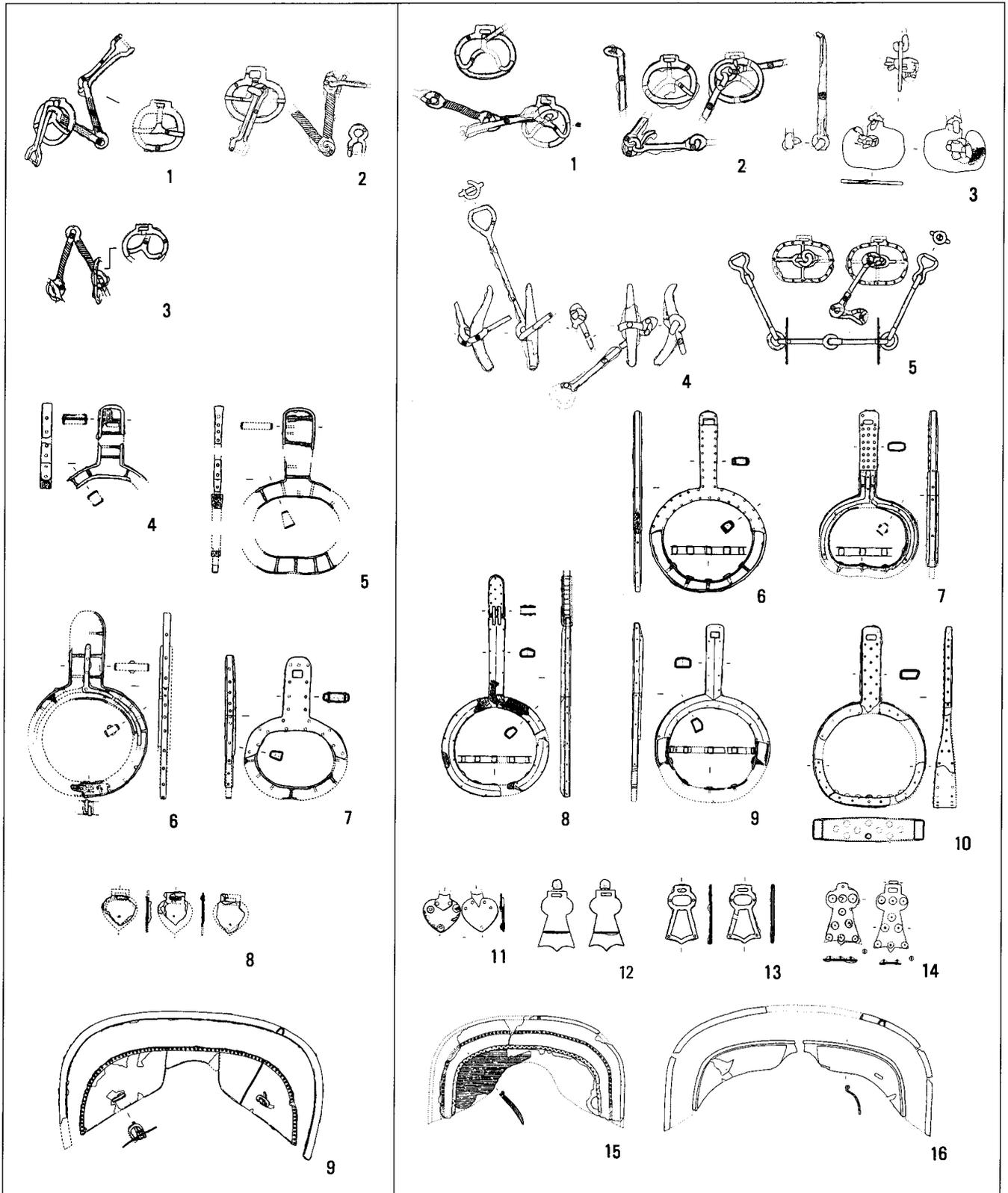
なお、「新羅系」・「非新羅系」ともに、馬具の製作地を知る有力な基準ではあるが、新羅系＝新羅製の馬具を常に指すとは限らず、あくまで馬具に見られる要素の分類基準であるため、ここではいずれにも「 」をつけて表記した。このうち、「新羅系」馬具については先に検討した〔千賀 2003〕なので、ここでは「非新羅系」の特徴をもつ馬装具の系譜について、その故地の候補地である大加耶圏の馬具との対比を通じて考えることにする。

②……………大加耶圏の馬具

1 馬装具の変遷

大加耶圏出土の馬具については、慶尚大学校による陝川・玉田古墳群の報告書に豊富な出土例が収められていて、それをもとに趙榮濟氏と柳昌煥氏が玉田古墳群の馬具の変遷を概観〔趙榮濟・柳昌煥 1998〕し、さらに同地域の馬具を対象にして検討された柳昌煥氏の論考〔柳昌煥 2000〕がある。ここでは、この二つの論考で分類されたⅠ期からⅣ期までの馬具の変遷に、さきの2系統の馬具の特徴の違いを当てはめながら、日本の馬装具の変遷に関わるものを中心にみていくことにする。

なお、この項のなかでの引用部分は、上記の2論考のうち日文に訳された趙榮濟・柳昌煥 1998からの引用であるが、馬具に関する見解などで明確に引用のかたちにしないうで紹介している部分もある。ご了解いただきたい。



I期

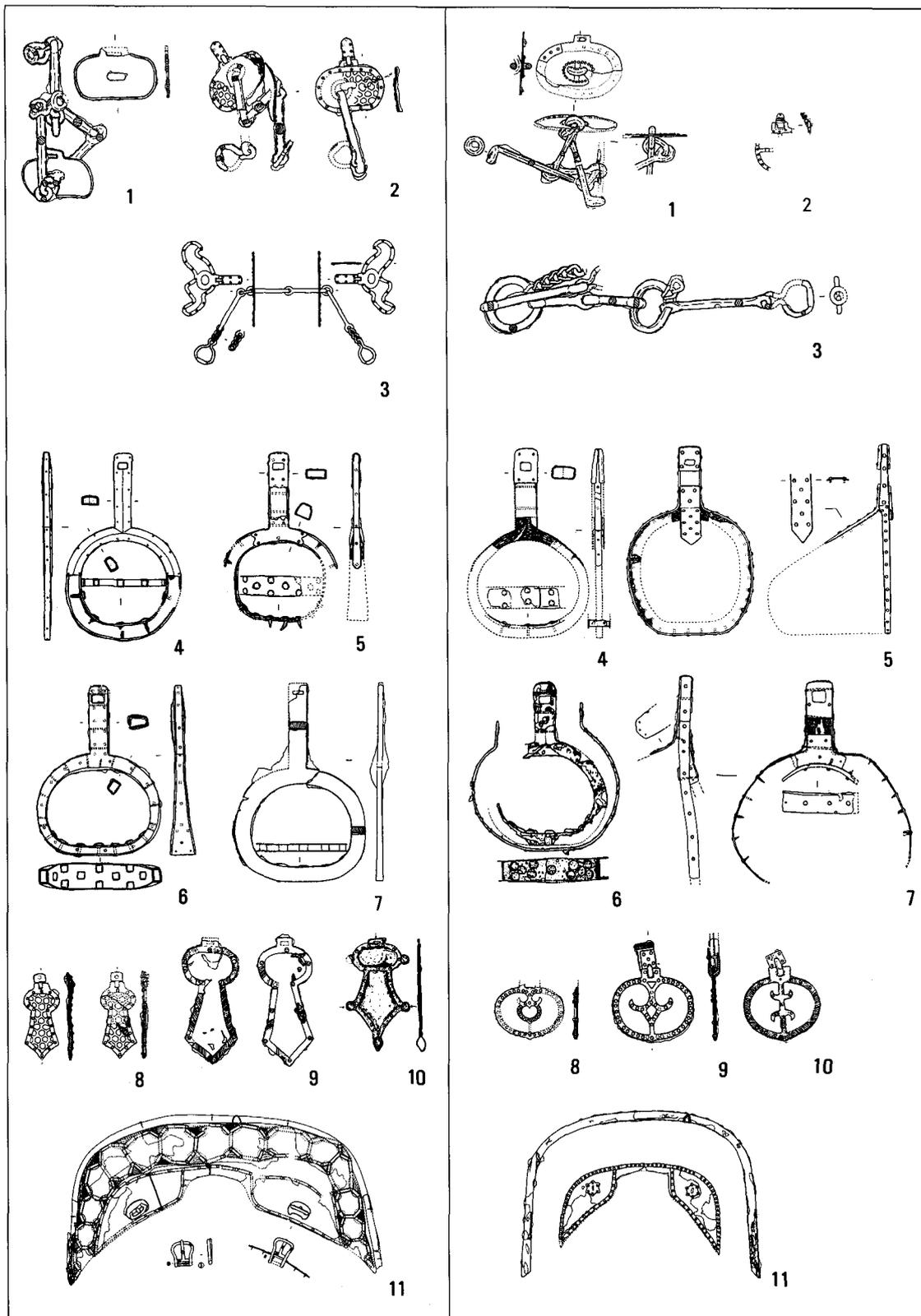
1・6. 玉田 68号墳 2・7・9. 玉田 67-A号墳
3・4・8. 玉田 23号墳 5. 玉田 67-B号墳

II期

1・2・8・10・12・15. 玉田M1号墳 3・11・16. 池山洞 35号墳
4. 池山洞 32号墳 5・9・14. 玉田M2号墳 6. 玉田 8号墳
7. 玉田 28号墳 13. 玉田 12号墳

図1 大加耶圈の馬具の変遷

(柳昌煥 2000 の馬具の編年観を紹介するために、論文中の1~4の挿図を表に作り替えた。その際に、小論に関わる一部の馬具は同時期のものと入れ換え、馬冑を鞍にかえたが、編年観は柳氏の考えそのままである。)



III期

1·5. 玉田20号墳 2·3·6~9·11. 玉田M3号墳
4. 玉田82号墳 10. 池山洞44号墳主石室

IV期

1·7. 礪溪堤斗-A号墳 2·8. 玉田M4号墳
3·9. 玉田M6号墳 4. 玉田M7号墳 5. 玉田
75号墳 6·10·11. 池山洞45号墳1号石室

I期（5世紀前葉）

玉田古墳群では、轡はいずれも環板轡であり、ともに逆Y字形の銜留め金具がつき、掘じり鉄棒の銜と二条線の引手で構成される。木心鉄板張輪鍔は、短い柄の上端が丸く幅が広い特徴が見られる。さらに鞍は、67-A号墳に鉄板張りの洲浜・磯分離鞍があり、この時期の唯一の杏葉である23号墳の心葉形杏葉は、鉄地金銅張品で立聞孔は「新羅系」の特徴がある。これらは、いずれも金官加耶圏の馬具に共通していて、「玉田古墳群への馬具文化の移入は洛東江下流域と深い関係がある」と想定され、金官加耶圏からの馬具の受容期と位置づけられた。

また、杏葉をもつ23号墳には、金銅製冠とともに馬甲冑と金銅装冑・大刀・鉞などが伴うことから、この時期には「重装騎兵」が出現し、支配集団は「武人的な性格が強かった」と想定された。

II期（5世紀中葉、第3四半期まで）

玉田古墳群では、轡はI期と同様の環板轡と鉄製長楕円形鏡板付轡、鉄地金銅張り長楕円形鏡板付轡がある。環板轡の引手はいずれも一条線になり、12号墳とM1号墳の計4個の環板轡のうち3個は、銜先に遊環を介して引手を連結させていて、これらはI期の轡になかった要素である。同様に遊環を使う轡は、M2号墳の鉄地金銅張り長楕円形鏡板付轡があり、この引手には別づくりの引手壺も伴う。この鏡板には、「新羅系」の特徴の立聞が付くが、新羅の轡にないこれらの要素を加えて新たに作り替えられた可能性はある。

杏葉は、M1・M2号墳と12・35号墳に扁円魚尾形杏葉があるが、M2号墳の鉄製杏葉は、その表面に新羅の杏葉にはない銀装の半球形飾りが付くのが注目できる。これは、同じ古墳の轡と同様に加耶での模倣・改造品の可能性が考えられる。さらに鞍は、M1号墳と28号墳に鞍金具があり、前者は金銅装、後者は磯が鉄板張りになっていて、ともに遺存状態はあまりよくないが洲浜・磯一体鞍の構造とみてよさそうだ。

なおこの時期の木心鉄板張輪鍔は、柳昌煥氏分類のIB4式とIB5式の鍔が中心であり、これには大加耶圏に特有の柄と輪の断面が五角形のものを含み、「大加耶の地域性を示す木心鉄板張輪鍔へと在地化したもの」と位置づけた。また、輪の踏込部の幅が広がる鍔（柳氏分類のIB5式）はこの段階に現れていて、M1号墳で扁円魚尾形杏葉とセットになることから、両氏は新羅からの移入品の可能性を想定された。

このように、新羅製の搬入品の馬具とともに、それを模倣・改造した加耶製品が同じ時期の古墳に見られるのである。なおM1号墳には、慶州の古墳出土品と同じガラス碗があり、搬入された新羅製品は馬具だけではない。

そして、この時期の馬具の所有形態には、「金銅装馬具—鉄製馬具一式—鉄製馬具一部という階層性が認定」できるとして、前段階より「支配集団内の階層分化が深化した」と性格付けた。

さらに、池山洞古墳群では、32号墳に鉄製の鐮を装着した轡、35号墳では鉄製長楕円形鏡板付轡があり、ともに銜と引手は鏡板の外側で遊環を介して連結し、後者の鉤金具には棒状の鉤がつく。さらに35号墳では、鉄製心葉形杏葉に帯状の鉤（吊）金具が銜留めされていて、鞍金具は左右の幅が広い低い鞍で洲浜・磯一体鞍である。このように、「新羅系」に加えて「非新羅系」馬具の要素が見られるのは、同じ時期の玉田古墳群の状況に共通する特徴である。

Ⅲ期 (5世紀後・末葉)

玉田古墳群ではM3号墳が代表例であり、「非新羅系」の馬装具が主になる。A～Cの3セットがあり、剣菱形杏葉をもつA・Bセットには下辺が内側に湾曲する長楕円形鏡板付轡が伴い、Cセットの変形f字形鏡板付轡には杏葉はない。このような馬装具の構成は、「大伽耶的な色彩を誇示している」と両氏は指摘した。

これらの轡に引手が付くのは、鏡板の外と内の両方があるが、いずれにも遊環と別づくりの引手壺があり、Cセットの轡の上端は3連の兵庫鎖と引手壺が続く。また剣菱形杏葉は、ともに下端の剣先部が鈍角になり、Aの杏葉が鉄地銀張りの11cm前後の小型品、Bの杏葉は鉄地金銅張りの18cmほどの大型品で縁金に斜線の刻み目が巡る。さらにAセットの馬具には、踏込部が幅広い木心鉄板張輪鍔が伴い、他は鉄製輪鍔である。またBセットの鞍は、海に亀甲文を連ねた金銅装の鞍金具であり、洲浜・磯分離鞍の構造で、磯金具に付く鋌帯には間隔を開けて鋌が巡る。

この一群の馬具に見られる要素の多くは、日本の初期のf字形鏡板と剣菱形杏葉などの馬装具、たとえば大阪・長持山古墳や埼玉・稲荷山古墳などの馬具の特徴に通じることは先に検討〔千賀1994〕した通りである。

なお柳昌煥氏は、このうちの長楕円形鏡板付轡を「大伽耶型轡」、そして氏分類のIB4・IB5・IIB1式の輪鍔を「大伽耶型鍔」と呼び、これに剣菱形杏葉を加えて「大伽耶型馬具」と名付けている。

さらに、池山洞古墳群の44号墳の主石室では、これらより新しい特徴の剣菱形杏葉が出土している。鉄地金銅張品だが、縁金を重ねた後で金銅板を一枚被せたとみられるものであり、剣先部が鋭角に尖る形とともに後出の要素である。このように、時期が下ると金具の製作工程が簡略化されるのは、日本の5世紀末から6世紀初頭ころの出土例でも同じように確認できる。

Ⅳ期 (6世紀前葉・中葉)

玉田古墳群では、M4号墳(6世紀第1四半期)で心葉形鏡板・杏葉が出土している。杏葉の立間は欠けているが、鏡板の立間には帯状の鉤金具が付いて、「新羅系」の特徴である。そして、これより時期の下るM6号墳(6世紀第2四半期)では、心葉形杏葉の立間に棒状の鉤金具が付き、M4号墳の杏葉は表面の金銅板が別被せだが、これは一枚被せに変わっている。これらの杏葉の内部には、新羅の馬装具に共通する三葉文にハート形を連結した忍冬文があり、前者は新羅からの搬入品、後者はそれを模倣したものと想定できる。ただ、M6号墳の杏葉に伴うのは環状鏡板付轡であり、それは立間に兵庫鎖を連ねたもので、引手には別づくりの引手壺が付く。

なお、池山洞45号墳1号石室にも同じ心葉形杏葉があるが、縁金と文様板は銀被せで斜線の刻み目があり、この内部は新羅系の文様とは異なり、棒状の鉤金具が付くこともあわせて加耶製の馬具に変化している。同時に出土した馬具は、踏込部の幅が広い木心鉄板張輪鍔と、洲浜・磯分離鞍があり、その他にも内部にX字形金具の付く環板轡、踏込部のみに鉄板を当てた鍔など、2セット分の馬具がある。

また、この時期には壺鍔が新たに現れ、玉田75号墳と陝川・礪溪堤古墳群の4-A号墳に出土例がある。後者の鍔が先に報告されて、その際には埼玉稲荷山古墳などの杓子形壺鍔に系譜的につな

がると思えたが、その後の前者の報告では、鐙の木目がよく残っていて、木心を輪鐙状に曲げてそれに革など有機質のもので壺部を付けたのだらうと柳昌煥氏が指摘された。つまり、木をくり抜いて作る日本の壺鐙とは基本的に構造が異なり、柳氏はこの壺鐙を、大伽耶の輪鐙から作り変えられた「儀装用の鐙」と性格づけている。

なお、これに隣接する74号墳で出土した鐙は、木心を曲げてはいるが、通有の木心鉄板張輪鐙とは異なる。つまり、外周にのみ巡る鉄板は、柄の上端まで達するのではなく、柄部の断面はほぼ正方形の特異なものである。この鉄板が輪部で幅狭くなるのは、75号墳の鐙に通じる特徴であり、鳩胸金具はないがこれも壺鐙として作られた可能性はあり、むしろこのような鐙を経て前者の壺鐙へと変えられたのではないだろうか。

2 大加耶圏の馬具製作

ここまでの大加耶圏の馬装具の変遷のなかで特に目につくのは、同地域で改造されたと見られる馬具であり、そのなかの主なものを列挙すると次のようになる。

Ⅱ期 轡 環板轡・長楕円形鏡板に遊環と引手壺を使用する。

杏葉 扁円魚尾形杏葉に銀装の半球形飾りを付ける。

Ⅲ期 轡 長楕円形鏡板の鉤金具を棒状のものに変える。

鞍 鞍金具を洲浜・磯分離鞍に変える。

鐙 木心鉄板張輪鐙の下半部の鉄板を省略した。

杏葉 扁円魚尾形杏葉から剣菱形杏葉への作り替え—?

剣菱形杏葉の表面を金銅板一枚被せに変えた。

Ⅳ期 杏葉 心葉形杏葉に棒状の鉤金具を付け、金銅板一枚被せにする。

鐙 木心鉄板張輪鐙に壺部を付けて壺鐙にした。

このなかでは、鏡板や杏葉の金銅板の被せ方の変化と、木心鉄板張輪鐙に当てる鉄板の省略は、ともに量産のための製作工程の簡略化を意図したことであり、壺鐙への作り替えは柳昌煥氏の指摘のように「儀装用」の性格を持たせた改造と考えられる。そして、扁円魚尾形杏葉から剣菱形杏葉への作り替えの可能性については後で検討するが、その他に共通するのは、「新羅系」・新羅製馬具を改変していることで、それらは金具の機能には直接関わらない部分の変更であり、むしろこの大加耶圏の独創性を示すために創り出されたと思えるのである。その際に加えられた新しい要素のうち、たとえば轡の銜と引手を連結させる遊環や別づくりの引手壺などは、百済地域の馬具に共通するものであり、その他の「非新羅系」馬具の特徴も大加耶や百済の地域で考案されたものが大半を占める。しかも、このような改造はあまり時を経ないで行われたようなので、同一地域内の工房による馬具の内産化が積極的に進められたことのあらわれと理解できる。

ここで玉田古墳群の馬具の副葬状況をみると、馬具をもつ29基のうち杏葉を伴うのは8基に限られるが、そのなかには23・M1・M2・M3・M4・M6号墳などの、首長墓系列に属する各時期の有力古墳が含まれていて、それらの馬具は、いずれも金銅装か銀装の飾り馬具である点は注目できる。さらに、これらの馬具を副葬する古墳のなかには、馬甲冑が6基、甲冑が13基（挂甲7，短甲1，冑10）に副葬されているが、これは飾り馬具をもつ古墳の数より多く、武装を優先させ

表 1 陝川・玉田古墳群の馬具と甲冑

古墳	轡	鍔	杏葉	鞍金具	馬冑	馬甲	冑甲	環頭大刀	時期
23号墳	環板轡	輪鍔	心葉形	○	○	○	○		I 期
67-A号墳	環板轡	輪鍔		○			○		
67-B号墳	環板轡	輪鍔					○	挂甲 短甲	
68号墳	環板轡	輪鍔		○					
5号墳		輪鍔						挂甲	II 期
8号墳	鑲轡	輪鍔					○		
12号墳	環板轡		扁円魚尾形	○					
28号墳	環板轡	輪鍔		○	○	○	○	○	
35号墳	環板轡	輪鍔	扁円魚尾形	○	○		○	挂甲	
42号墳	鑲轡			○					
91号墳		輪鍔				○			
95号墳		輪鍔							
M1号墳	環板轡	輪鍔	扁円魚尾形	○	○	○	○	挂甲	
M2号墳	板轡	輪鍔	扁円魚尾形	○					
7号墳	鑲轡								III 期
20号墳	板轡	輪鍔		○			○	挂甲	
24号墳	鑲轡	輪鍔							
70号墳	板轡	輪鍔		○			○	○	
72号墳	板轡								
82号墳	板轡	輪鍔							
M3号墳	板轡	輪鍔	劍菱形	○	○		○	挂甲	
74号墳		輪鍔		○					IV 期
75号墳		壺鍔		○				○	
76号墳	板轡	輪鍔							
85号墳	環板轡								
86号墳									
M4号墳			心葉形	○				○	
M6号墳	円環轡		心葉形	○				○	
M7号墳		輪鍔		○				挂甲	

趙榮濟・柳昌煥 1998 「陝川玉田古墳群の馬具」『古文化談叢』40

柳昌煥 2000 「大加耶圈馬具の變化と劃期」『韓國古代史と考古学』より作成

I期 = 5世紀前葉 II期 = 5世紀中葉 III期 = 5世紀後葉・末葉 IV = 6世紀前葉～中葉

た集団との印象が強い。とくに、II期に馬甲冑を副葬する古墳が4基集中して、この段階から重装騎兵による強固な軍事力を保持したことが読み取れる。そして、このような集団のなかで飾り馬の使用を限定することで、その権威の象徴としての効果を高めるとともに、それを具体的に表現するために、大加耶圏で独自の馬具工房の経営と管理が行われたと推測でき、この地域特有の馬装具が作られた背景をこのようなところにあると推測することができる。

③……………日本出土馬具との関わり

大加耶圏の馬装具のなかで日本出土の馬具の系譜に直接関わるのは、f字形鍔板と劍菱形杏葉、そして心葉形・楕円形飾り馬具が特に重要である。

1 f字形鏡板と剣菱形杏葉

剣菱形杏葉の系譜

5世紀後半から加わるf字形鏡板と剣菱形杏葉の飾り馬具は、大加耶圈との交流でもたらされたとの見解〔千賀1994〕を先に示したが、それ以降に加わった報告例とともに問題点を整理しておくことにする。

まず、初期の剣菱形杏葉の類例は、大加耶圈の出土例の他に百済地域でも知られるようになったため、それらを加えて見直す必要がある。

ここで、玉田M3号墳の2種類の杏葉を比較しながら改めて見ると、それらの個体差が目につく。まず大きさの違い、Aセットの杏葉=杏葉Aは11cm前後の小型品、Bセットの杏葉=杏葉Bは17cm前後の大型品である。そして、杏葉Aは鉄地銀張りで内部に連続亀甲文の透彫りがあり、杏葉Bは鉄地金銅張りで縁金に斜線の刻み目を巡らせ、縁金の鋸の数は杏葉Aは20本と多いが、杏葉Bは間隔が疎らで10本が要所にのみ使われている。

これらの違いの意味を知る手がかりは、それぞれの共伴する馬具にあるようだ。この古墳の最も上位のBセットの馬具には、下辺が内側に湾曲する長楕円形鏡板付轡が伴い、鏡板の内側で引手を連結させ、鏡板の中央に銜を覆う楕円形の金具で蓋にしている。これは、外側に引手を露出させる轡に比べると、装飾効果を高める新しい改変であり、木心鉄板張輪鍔より丈夫な鉄製輪鍔を採用するのとともに、新しい要素と言える。なお、鉄製輪鍔については、同時期の百済地域に出土例があり、その影響による模倣品ないし搬入品と想定することもできる。そうするとこれらに伴う大型の剣菱形杏葉は、Aセットの小型杏葉よりは後の製作と考えていいのではないだろうか。

先の小論では同じ古墳に大小の杏葉があるので、「大きさの違いは時期差に対応するのではなく、最初の段階ですでに区別して製作されていた可能性」を想定したが、そうではなく、まず小型品が先にありそれが大きなものに作り替えられたのではないだろうか。もっともこの変化は、玉田M3号墳の被葬者一世代の間ほどの短期間での改変であり、杏葉の変遷のなかではほぼ同時期に属するものだろうが、最初にどのような形と大きさの杏葉が作られたのかがわかれば、その起源や祖形を知る手がかりになるのは間違いない。

そうすると、このM3号墳の杏葉Bは、その縁金の刻み目が池山洞45号墳の独特の文様をもつ心葉形杏葉にも見られ、この地域での製作とみて間違いないだろうし、また杏葉Aも、同時に作られた轡の長楕円形鏡板とともに、これも同様に考えられる。つまり、Aセットの小型杏葉からBセットの大型杏葉への作り替えから、さらに池山洞44号墳の杏葉のように、剣先部が鋭角になり表面の金銅板は一枚被せの、時期が下る要素を備えたものまで、大加耶圈のなかで剣菱形杏葉がある程度の期間に継続的に製作・使用されていたと考えられる状況なのである。

そして百済には、初期の特徴をもつ剣菱形杏葉はつぎの2例がある。その一つは、公州の北に位置する天安・龍院里古墳群の例であり、多くの土壙墓のなかの大きな1号石槨墓から出土した。長さ8cmの小さな杏葉で、縁金を鋸留めした鉄製品、楕円形部の縁金の下端は内側へ曲がり、周囲の鋸は、報告書の写真では図よりも多く並んでいると見えるので、鋸を加えた図も添えておく。これに伴う馬具は、鐙轡と木心鉄板張輪鍔（柄の鉄板は上下が分離）、鞍金具と環状雲珠・辻金具である。

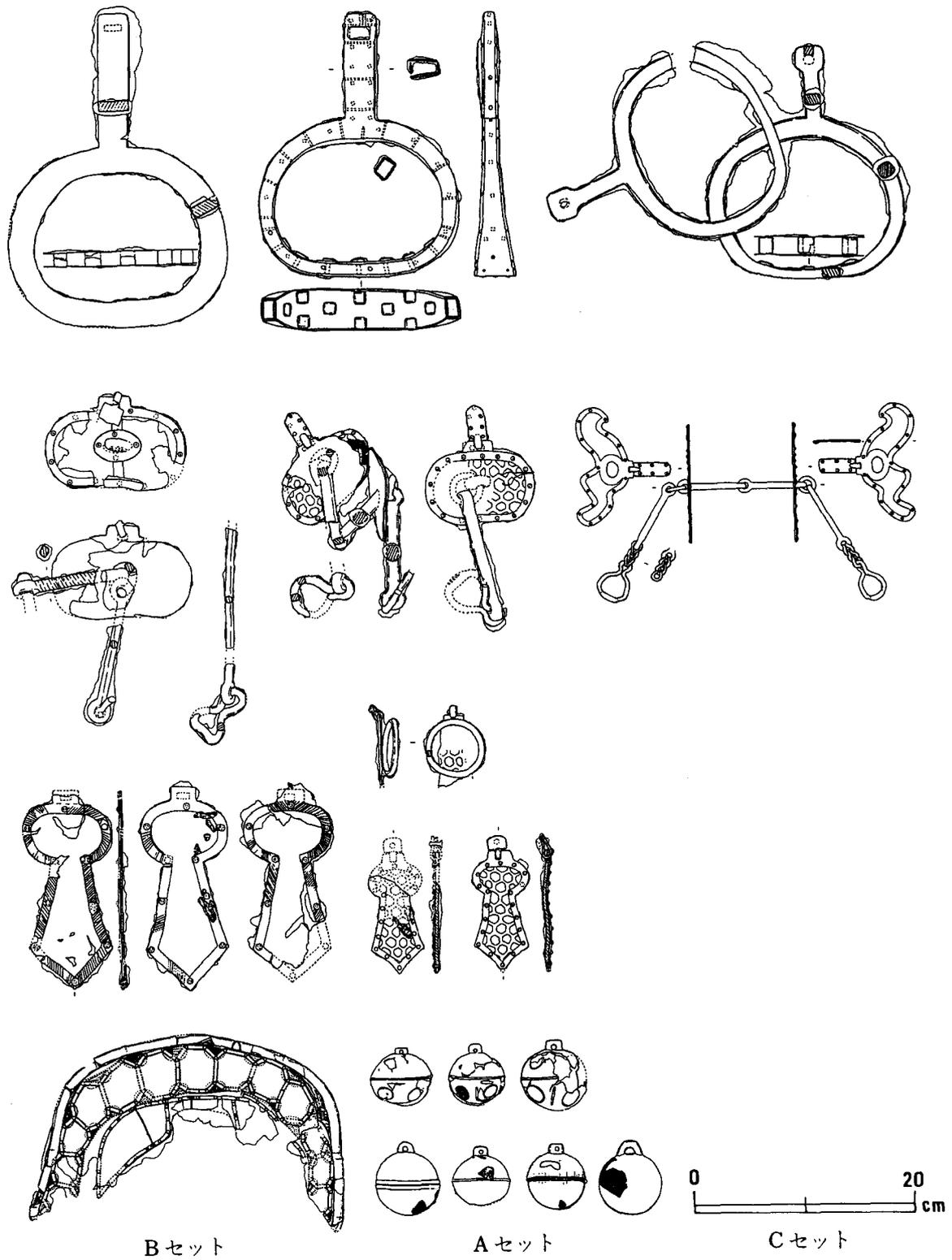


図2 玉田M3号墳の主要馬具 (鞍は縮尺が異なる)

また、扶安の竹幕洞祭祀遺跡（5世紀後半か）の剣菱形杏葉は、鉄板が1枚で長さ11.6cm、縁に沿って鉄鋌があるので、本来は縁金が巡り、金銅張りないし銀張りであった可能性も考えられる。遺跡の性格から厳密なセット関係は特定しにくいだが、透彫り鞍金具と心葉形杏葉、馬鈴、馬鐸などが同時に出土した。

ともに10cmを前後する小型品であり、その外形は剣先部が鈍角になる特徴がある。前者のように縁金を変形させた文様表現は、福岡・塚堂古墳の杏葉の剣先部にS字形の文様板があるのにやや通じ、後者の杏葉は、その形・大きさともに福岡・勝浦12号墳や岡山・築山古墳などの日本列島の代表的な初期の例によく似ている。

なお、海南・月松里造山古墳の馬具は、f字形鏡板と剣菱形杏葉がセットになる数少ない例であるが、大型の杏葉の剣先部を菱形に近く直線的に作ることや、一枚被せの金銅張りの細い縁金の形など、日本の同種の馬具とは明らかに異なる。それでも、先のような剣菱形杏葉の例が加わったことによって、早くから知られる伝・宋山里出土などの初期の特徴をもつf字形鏡板の出土例とともに、この造山古墳の馬具の組み合わせの背景について改めて評価し直す必要があるだろう。つまり、この馬装具のセット関係が、この地域を含む百済で5世紀代に成立していた可能性は十分考えられるようになったのである。

このように大加耶と百済には共通する馬装具があり、大加耶のこの種の馬具が同地で考案されたのか、百済からもたらされたのかについては、日本へのこれらの馬具の系譜を探ることに直接関わる問題なので、つぎに、剣菱形杏葉が考案された地域の韓国での議論のようすを少し付け加えておく（〔成正鏞2003〕を参考にした）。

剣菱形杏葉の考案地域

まず金斗喆氏は、玉田M3号墳の剣菱形杏葉が最古の例として、大加耶が新羅の扁円魚尾形杏葉を受容して作り替えたと考えた。また、李尚律氏は、玉田M2号墳や公州・宋山里3号墳などの杏葉が、扁円魚尾形杏葉に似た形で下縁が水平で真ん中だけ突出していて、これを「剣菱系杏葉」と呼んで剣菱形の祖形と考え、百済に起源を求めた。これに対して成正鏞氏は、先の龍院里1号石槨墓の年代は4世紀末から5世紀初頭であり、玉田M3号墳より明らかに先行すると考え、その剣菱形杏葉は小型で縁金の「鋌の数が多い古式的特徴を備えている」ことと、百済地域の馬具の年代の古さを有力な根拠にして、剣菱形杏葉の祖形を百済に求める立場に立つ。

まず、扁円魚尾形杏葉から剣菱形杏葉への流れは、外形はその下端部を突出させるだけの変形なので説得力はあるが、外周を巡る縁金の楕円形部と剣先部を画する区画帯の有無に注目すると、まだ検討の余地はある。つまり、扁円魚尾形杏葉は縁金のないのが大半で、一部の縁金を伴う例には区画帯があり、これに比べて、初期の剣菱形杏葉には区画帯のないのが主流なので、両者は直接にはつながりにくい。なお、咸安・道項里54号墳の杏葉を剣菱形杏葉に含める見解が最近出されているが、これがそうであれば、たとえば玉田12・35号墳などのよく似た形の杏葉も剣菱形杏葉に含まれるだろう。扁円魚尾形杏葉との区別をどこに求めるかが課題だが、どちらに含めるにしても、これらのなかで縁金の巡る金具には区画帯があり、このあとに続く時期のM3号墳の杏葉の形とのあいだにはまだ隔りがあるように感じる。

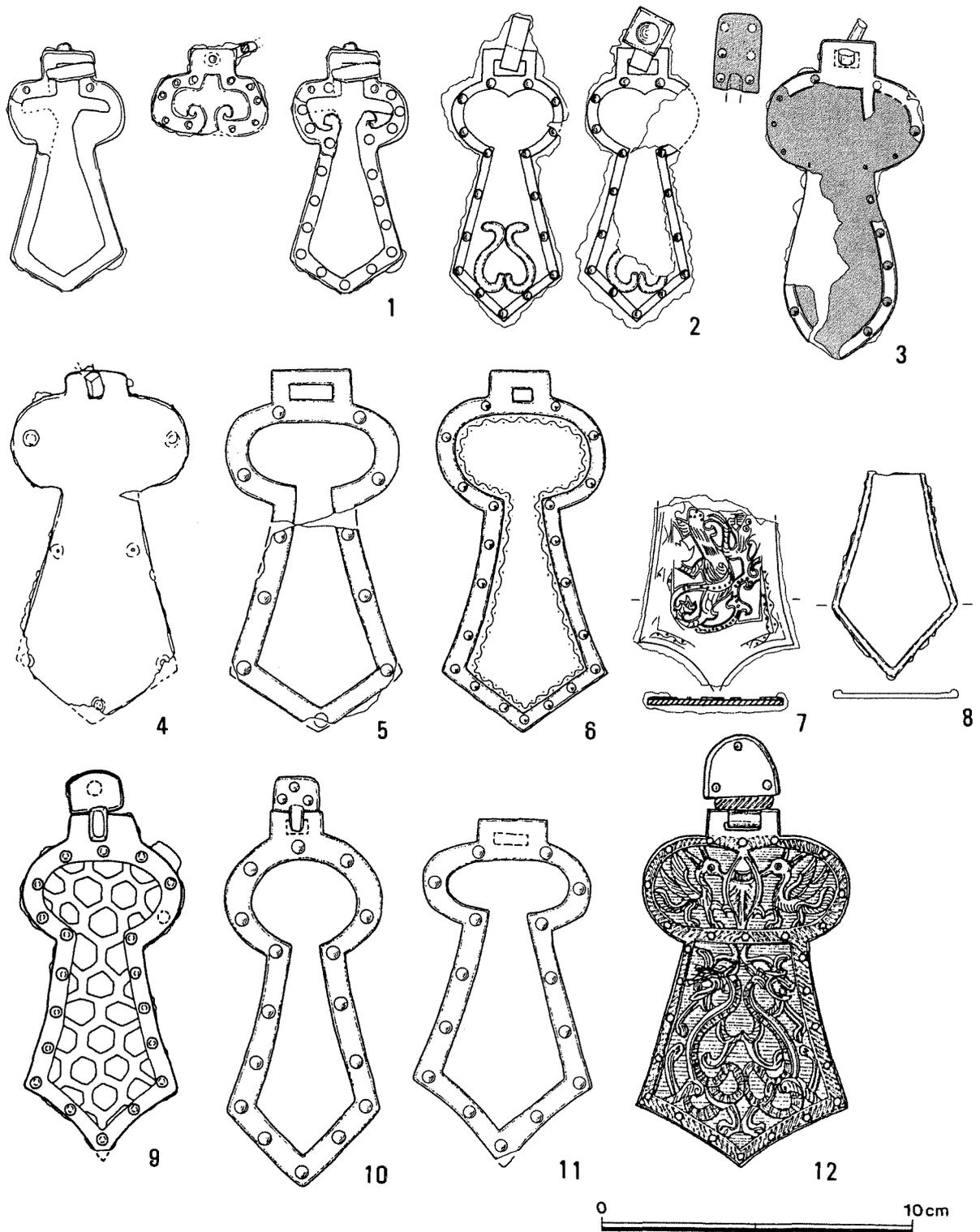


図3 小型の剣菱形杏葉

1. 公州・龍院里1号石槨墓 2・7. 福岡・塚堂古墳 3. 静岡・伝岡崎出土 4. 扶安・竹幕洞遺跡
 5. 福岡・勝浦12号墳 6. 岡山・築山古墳 8. 奈良・円照寺墓山2号墳 9. 陝川・玉田M3号墳
 10. 大阪・長持山古墳 11. 長野・新井原12号墳4号土壙 12. 慶州・飾履塚

なお、百済に祖形を求める見解では、百済古墳と加耶古墳の実年代の並行関係が問題になるだろう。たとえば、龍院里1号石槨墓の年代を李尚律氏のように6世紀初頭まで下げる考えもあり、現状では両地域の古墳の編年観について研究者の間で見解の差があり、今後の議論にまちたい。

馬具に関していえば、たとえば龍院里1号石槨墓で共伴する鐮轡には、扱じらない鉄棒の銜と長い一条線の引手が付いている。これらは、ともに加耶地域の轡の変遷のなかでは5世紀中葉以降からの新しい要素といえるので、この一群の馬具がその頃まで下る可能性は考えられる。また、成氏の年代観に従えば、百済では轡のこの変化が加耶より早かったということになり、そうであれば外部からの影響などを含めたその背景を考えるのも課題になる。

また、この剣菱形杏葉が小さな鉄製品である点は、4世紀代に初期の鉄製心葉形杏葉が出現していたことを考えれば、このような金具が先行して作られた可能性はありうるだろう。さらにこの杏葉の、楕円形部の立聞の下に縁金が巡らないのは他に例がなく、先の玉田M3号墳でみたように小型の剣菱形杏葉が先に作られたことと、縁金の銜の数の多さとともに、初期の特徴を備えた杏葉であると評価できる。

なお、龍院里古墳群で馬具を副葬する6基のうち、杏葉があるのはこの1号石槨墓のみであり、一般的に馬装の要素の少ない馬具が集まる古墳群なので、この古墳が仮に5世紀後半や6世紀初頭まで下るのであれば、これが鉄地金銅張品を模倣した杏葉の可能性はある。それでも、その模倣の

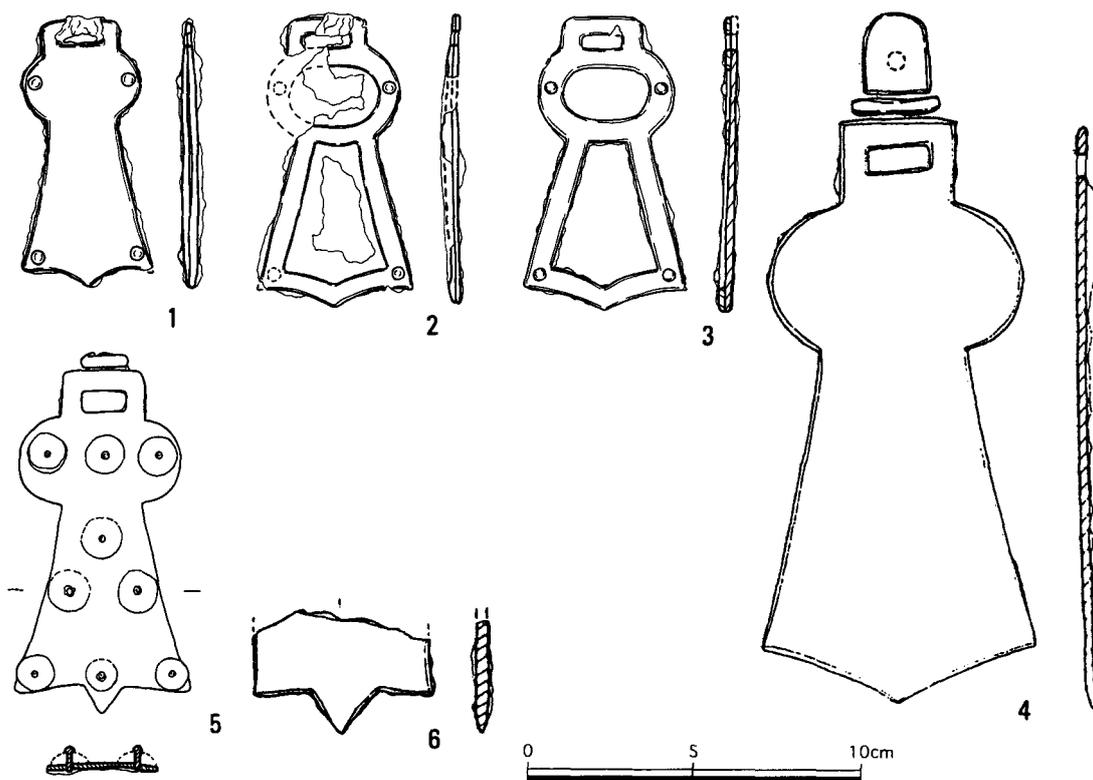


図4 剣菱形杏葉に類似する杏葉

1・2. 玉田35号墳 3. 玉田12号墳 4. 咸安・道項里54号墳 5. 玉田M2号墳 6. 公州・宋山里3号墳

対象になった杏葉がこのような初期の要素を備えていたのだから、この杏葉の意味はかわらない。

そうすると、先にあげた道項里 54 号墳や玉田 12・35 号墳などの、扁円魚尾形と剣菱形の中間形態の杏葉の形は、むしろ龍院里の杏葉に近く、特に成正鑄氏が注目した立開の幅の広さは「新羅系」の帯状の鉤金具が付くなごりと理解できるのである。また、李尚律氏が名づけた「剣菱形杏葉」が、公州・宋山里 3 号墳で確認されていることをあわせると、扁円魚尾形杏葉から剣菱形杏葉への改造の条件は先の大加耶圏と同じ状況になる。ただ百済の公州地域には、初期の特徴をもつ f 字形鏡板の出土例（伝・宋山里出土）があり、この轡が同地域で考案された可能性がある点で、大加耶圏と条件が異なる。つまり、公州の工房であれば、扁円魚尾形杏葉から変化させた形の金具に、f 字形鏡板と同様に外周にのみ縁金を巡らせることが、共通の製作工程として考え出されたと想定できるのである。

以上のように、剣菱形杏葉が考案された地域を大加耶圏と考えるときには、直前の時期の縁金のある扁円魚尾形杏葉との違いが問題であり、一方の百済地域の場合には、古墳の実年代観について研究者の間で見解が大きく分かれる点は看過できないが、馬具の製作条件としてはこちらのほうが可能性が高いだろう。

これに伴って、列島にもたらされた同種の馬具の故地については、大加耶と百済の両方を考える必要があり、百済と大加耶から直接の場合と、百済製品が大加耶を経由してくる場合と、それぞれが想定できる。

なお、これらの剣菱形杏葉とセットになる馬具と同じ頃に、鉄製の長楕円形鏡板付轡を含む馬具が列島にもたらされている。たとえば、大阪・長持山古墳や京都・穀塚古墳などがその初期の例であり、この轡は大加耶との関係の深さから、同地域に直接つながる馬具と考えられ、f 字形鏡板と剣菱形杏葉の馬装具の一群もこれらの馬具といっしょに持ち込まれたこともあったのだろう。

木心鉄板張壺鐙の系譜と製作地

つぎに、日本のこれらの馬具のなかでは、和歌山・大谷古墳と埼玉・稲荷山古墳で木心鉄板張壺鐙が相伴しているので、この鐙についても同時に検討しておく。大加耶圏では、剣菱形杏葉などの馬具に伴うのは木心鉄板張輪鐙か鉄製輪鐙であり、さらに陝川地域で出土した 2 例の壺鐙は日本のものと構造が異なる点に注目できる。

これらは杓子形壺鐙に属し、日本のは木をくり抜いて柄から壺部までを作る構造のものだが、大加耶圏の壺鐙は木を曲げて輪鐙の形を作り、それに革などで壺部を付けている。なお、朝鮮半島でも木をくり抜いた壺鐙の出土例があるが、それは義城郡鶴尾里古墳の 3 号堅穴式石槨（堅穴系横口式石室か、6 世紀前葉）の、鉄製輪鐙の輪部に木をくり抜いた壺部を釘で固定した構造の鐙である。先の大加耶圏の 2 例は鉄板張りの木製輪鐙に革の壺部、そして福岡・宮地嶽古墳の壺鐙は金銅の輪鐙に金銅の壺部、というようにこれらには材質の違いはあっても、輪鐙からの改造という点で構造的に共通し、先に紹介した柳昌煥氏の「儀装用の鐙」という形容は、この一連の鐙の性格をよくあらわしている。

しかし、いずれも日本の木心鉄板張壺鐙とは構造が違うので、その系譜はまだ解決できていない。それに加えて、これらの初期の壺鐙は、たとえば埼玉稲荷山古墳では f 字形鏡板付轡、大谷古墳で

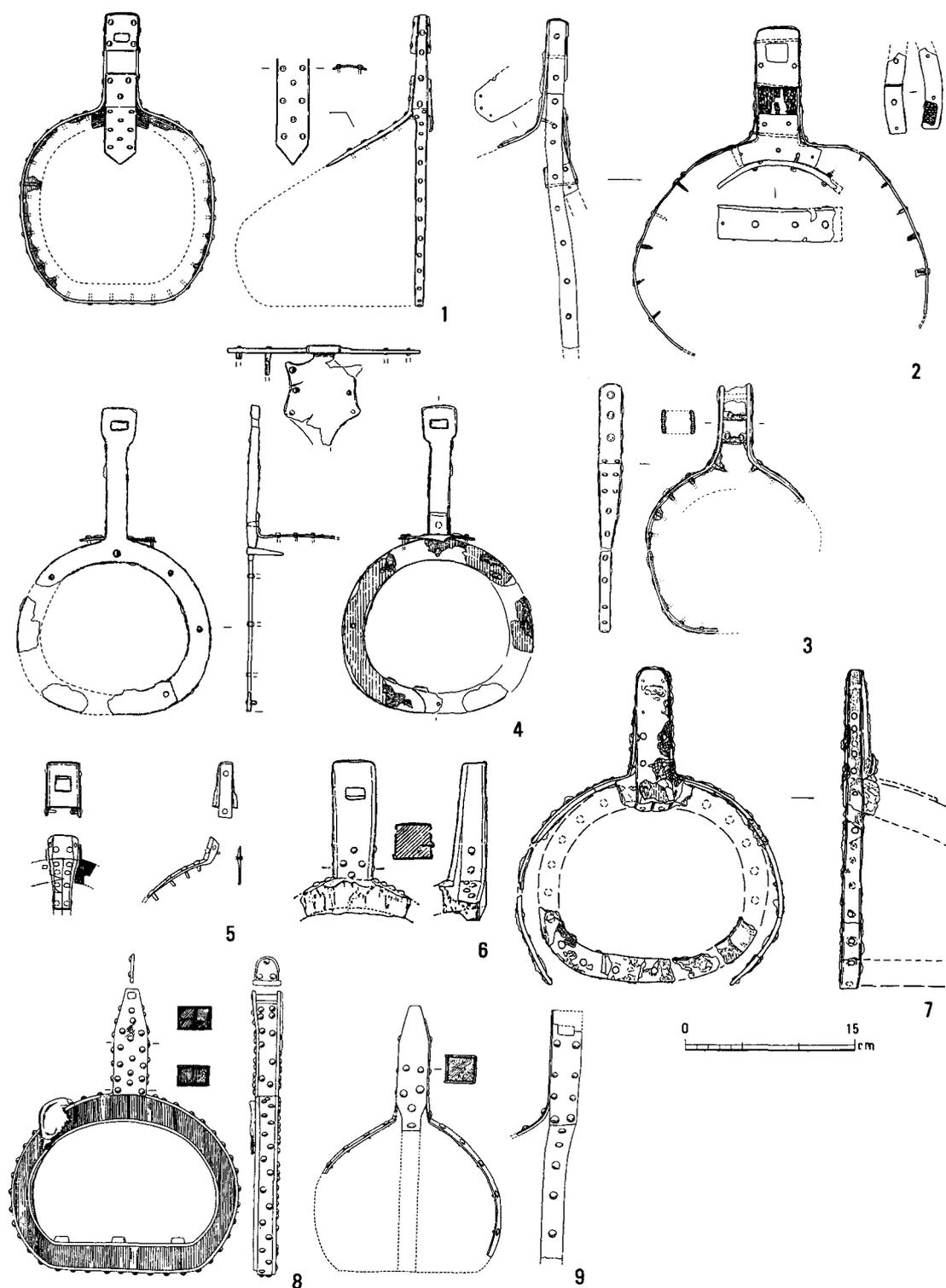


図5 日韓の壺鏡の比較

1. 陝川・玉田75号墳 2. 陝川・礪溪堤岫-A号墳 3. 陝川・玉田74号墳
4. 義城・鶴尾里古墳1号石室 5. 埼玉・稻荷山古墳 6. 福岡・山ノ神古墳
7. 福岡・番塚古墳 8. 和歌山・大谷古墳(a類) 9. 大谷古墳(a'類)

は馬甲冑と同一セットであり、おそらく福岡・勝浦 12 号墳でも剣菱形杏葉がこれに伴うようなので、それらと一緒にもたらされたのであれば、それぞれの系譜についても大加耶圏を除いて検討しなおす余地がある、ということになってくる。

ところで、金具を使わない木製壺鐙は、列島内でも早くから作られていた。たとえば、長野・榎田遺跡では 5 世紀第 3～第 4 四半期の堆積層で出土し、その表面は黒漆塗りで、踏込部の前に舌を作り出している。木心鉄板張壺鐙の場合は、舌部の有無は確認できないものが多いが、基本的にはこれと同じ構造と考えられる。つまり、壺鐙が古墳に副葬され始めるのと同じ頃に、集落遺跡でも壺鐙が製作・使用されていたのである。

なお、大谷古墳には 2 対の木心鉄板張壺鐙があるが、棺外西に馬甲冑と一緒に置かれた鐙 (a 類) があり、棺外東の金銅製馬具を収めた木箱のなかに鐙はなく、その外に外周にのみ鉄板を張った壺鐙 (a' 類) が置かれていた。ともに側面の孔で鐙鞆を受けていて、前者は上端の前後に渡した鉄棒で鐙鞆を受け、後者は直接木心に開けた方孔がその役割を果たす。前者と同じ鐙は勝浦 12 号墳にもあり、これには鳩胸金具が付くが、ともに出土例は限られる。そしてこれとは別に、輪鐙と同じように前後方向に方孔を開ける b 類は、埼玉稲荷山古墳の鐙をはじめ後に続く例もあり、こちらの方が主流であった。

先の論考 [千賀 1988] では、a 類と a' 類を I 式、b 類を II 式に分類し、I 式の初期のものは舶載品と考え、II 式の鐙はそれをもとに輪鐙から作り替えた想定した。たとえば状況的には、大谷古墳の a' 類の鐙は a 類の鐙の模倣品と考えられ、それが列島内で作られたのであれば、II 式の鐙も同様の可能性が考えられる。このように壺鐙については、最初の舶載品 = a 類の鐙の後はその模倣品と列島製品が大半を占めたと想定できる。実際に榎田遺跡例のような木製壺鐙は、5 世紀中・後葉代の木をくり抜いた木製輪鐙と同じ製法で、壺鐙の形を模倣する時にも無理なく作れたのだろう。なお、このような壺鐙は、機能的には装飾効果とともに、足に接する面が広いことで安定感が得られるため、乗馬に不慣れな人のための鐙という性格づけができ、列島で特に普及した理由はその辺にありそうだ。

このように、杓子形の木心鉄板張壺鐙のうち I 式の鐙に共伴する馬具の例では、大谷古墳の馬甲冑と勝浦 12 号墳の剣菱形杏葉は、大加耶圏以外の地域からもたらされた可能性が想定でき、ここでも百済を候補に含めて考えることの必要性を感じる。その地域を特定するには、I 式 (a 類) の壺鐙の類例が確認できればわかりやすいが、そうでなくともその柄の上端部にある鉄棒の使い方が特徴的なので、それと同じように力のかかるところで使った金具を探すのも手がかりになる。さらに II 式 (b 類) の初期の壺鐙が出土する可能性も含めて、これらの地域での今後の新たな出土例に注目しておきたい。

2 楕円形・心葉形の飾り馬具

6 世紀に新たに加わる馬具を代表するものであり、全体が楕円形であってもその下端に尖った突起があれば心葉形と呼んで区別するが、どちらも内部の文様は、鏡板は十字文が主で杏葉は三葉文などの唐草文を採用していて、共通する要素は多い。

朝鮮半島でこの形の鏡板・杏葉が出土するのは、高句麗と新羅に多く集中するが、それらに付く

鉤金具は「新羅系」の帯状の鉤であり、日本で出土するものには主に棒状の鉤金具が付くという違いがある。そうすると帯状の鉤が棒状に作り変えられた地域を探す必要があるが、その有力な候補地が大加耶圏なのである。

大加耶圏でこれに関わるのはⅣ期の馬具であり、玉田M4号墳（6世紀第1四半期）の忍冬文の心葉形杏葉と十字文の楕円形鏡板は、ともに表面の金銅板は台板と縁金・文様板を別被せにしている、杏葉の立間は欠くが鏡板の鉤金具は帯状の「新羅系」である。そして、これに続く6世紀第2四半期のM6号墳では、心葉形杏葉は内部の忍冬文が崩れて金銅板は一枚被せに変わり、その立間に付くのは「非新羅系」の棒状の鉤金具に作り変えられている。同じ時期の轡には、礪波堤4-A号墳の例があり、楕円形鏡板で銜と引手は鏡板の内側で遊環を介して連結させていて、この連結法は、Ⅲ期の玉田M3号墳Bセットの楕円形鏡板付轡で採用されたものが受け継がれている。さらに引手は、上端を直角に曲げて共づくりの引手壺にしている、これも新しい要素である。

このうち日本列島にもたらされた初期の例は、金具の下端に突起のない楕円形鏡板・杏葉が主であり、棒状の鉤金具をつけているが、表面の金銅板は別被せで、三重・井田川茶白山古墳の杏葉のように新羅の忍冬文をそのまま写したのものがあり、新羅の馬具に近い特徴を残している点は注目できる。このように、列島には「非新羅系」に作り変えられた馬装具がもたらされているのであり、それは大加耶Ⅳ期の馬具に系譜的につながると考えられ、つまり大加耶地域で改造された馬具であり、その前段階に入っていた「新羅系」=新羅製の心葉形の飾り馬具はほとんどもたらされていない。

また、玉田M6号墳の杏葉に伴う環状鏡板付轡は、円形の鏡板に兵庫鎖の立間が付く、引手に別づくりの引手壺が続く点が、いずれも日本で出土する同種の轡のなかでも初期の特徴であり、それらに系譜的につながる。この轡もこの頃にもたらされたと考えられ、その後は列島で乗馬用の実用轡として急激な普及を迎えることになる。

この馬装具の初期の一例である井田川茶白山古墳の馬具は、鏡板は内部が十字文、杏葉は三葉文にハート形を連結させた忍冬文で、ともに表面の金銅板は別被せである。この他にも、滋賀・鴨稻荷山古墳と福岡・寿命王塚古墳の三葉文楕円形杏葉には、金銅板別被せの初期の特徴がみられ、これらの杏葉にはともに十字文楕円形鏡板付轡が伴うが、前者は杏葉と同じ金銅板別被せで、後者の鏡板は金銅板の一枚被せに変わっている。製作技法の異なる前者と後者の違いを、一般的には舶載品とその模倣品=列島製品と区別しているが、実際には、先の玉田M6号墳の例のように、後者のづくりの馬具が舶載品に含まれることも想定しておく必要はある。

なお、この種の馬装具の日本での例は多様であり、ここにあげた他にも別の舶載馬具が、同じ頃か少し遅れてもたらされている。たとえば、無文の長楕円形鏡板や忍冬文の心葉形鏡板の付く轡や、無文・十字文・三葉文などの心葉形杏葉など、それぞれの系譜については改めて検討を要するが、基本的には「新羅系」から改造された「非新羅系」馬具という共通の特徴を備えている点は変わらず、大筋では同系統の馬具と考えていいだろう。

	轡	杏葉	雲珠・辻金具
玉田M4号墳			
玉田M6号墳			
礪波堤口A号墳			
井田川茶臼山古墳			
鴨稻荷山古墳			

図6 楕円形鏡板・杏葉の初期の例

④……………日本にもたらされた「非新羅系」馬具

先に日本出土の「新羅系」馬装具の系譜を検討した時に、6世紀後半から集中的に現れるこの系統の馬具は、大加耶が新羅に滅ぼされた際に、その地域の工人たちが新羅の工房に吸収されて、それを契機にして新羅の馬具にそれまでとは異なる彫金技法が採用されたのだろうと考えた。今回の対象としたのは、それ以前の大加耶圏の工房の様相であり、そこではむしろ百済との関係が焦点になる。馬装具の出土例が知られる大加耶圏の中心の高霊・陝川地域では、5世紀を通じて「新羅系」馬具を受け入れて、それを「非新羅系」の特徴を備えた馬具への作り替えが頻繁に行われていたことが明らかになった。

5世紀代の朝鮮半島では、高句麗の南下に対抗して百済と加耶、さらに倭が援軍を出して戦うという事態が繰り返されていて、5世紀後半(475年)には百済の都漢城が高句麗に滅ぼされ、都を熊津(公州)に移して国の再建にあたることになる。その頃に、百済系の文物が大加耶や倭にもたらされたのは、戦禍を逃れた人々の亡命・移住に伴うこととして十分考えられ、同時に、金工などの技術者の流出という事態もあっただろう。大加耶圏の工房がそのような彼らを受け入れていれば、百済に共通した金工品がそこで製作されるのは自然の流れである。

たとえば、玉田M3号墳に副葬された7口の儀仗的な環頭大刀のうち、龍鳳文環頭大刀A・Bと龍文環頭大刀の3口は百済製品の可能性が強く、1口の単鳳環頭大刀は「土着的刀装を基礎に中国的な環頭大刀のかたちをとりいれた作品」で加耶製品と考えられている[穴沢・馬目1993]。これは、剣菱形杏葉など馬装具のこの地域での出現の様相によく似ていて、さらに「新羅系」馬具から「非新羅系」=百済系馬具への改造にも彼らの果たした役割が重要になってくる。

このなかでは、f字形鏡板と剣菱形杏葉を伴う馬装具は百済で考案されたと考えられ、その初期のものは大加耶圏に搬入され、それをもとに製作された馬具とともに、玉田古墳群や池山洞古墳群の首長墓クラス古墳の副葬品に加えられたと想定できる。この想定からすれば、この馬装具の初期のものは百済製品である可能性が高いが、たとえば初期の特徴をもつ細身のf字形鏡板付轡が、釜山・福泉洞23号墳と長野・新井原4号土壙で出土しているように、洛東江河口域=旧金官加耶圏と日本列島にまで運ばれたものもあり、それらを流通させた主体は百済と大加耶ともに考えられる。これも、朝鮮半島南部が5世紀を通じてしばしば戦乱状態におかれたことが背景にあったのは間違いない。

その一方で、高句麗との戦いに援軍を出した倭に対する見返りの一つとして、馬と馬飼集団の日本列島への派遣が実現したのだろう。それは5世紀の中ごろから後半の時期が最も盛んになり、まず河内・伊那・上野などで牧の経営が本格化するとともに、それらの馬に付ける多くの馬具がもたらされたという流れが想定できる。そして、金色に飾られた馬装具とともに、それを装着した飾り馬を権威の象徴とする意識も同時に伝えられたと考えられるのである。

初期の馬装具、すなわちf字形鏡板と剣菱形杏葉がセットで揃うのは、河内と吉備などの限られた地域の有力古墳が最初の例であり、その稀少性は意識されていたようだ。そしてそのすぐ後には、それらの模倣品が製作されるとともに主要な地域の有力層にまでもたらされて、ようやくそれを付

けた飾り馬の役割が広く認識されるようになったのだろう。ところで、これらの金銅張りの馬装具が加わる頃の古墳には、性格の異なる2組の馬具を副葬する例がある。たとえば大谷古墳では、よく知られた金銅製馬具一組のほか、馬甲冑と一緒に置かれたもう一組の馬具があり、前者は装飾的要素のつよい飾り馬用の馬具、そして後者は飾らない乗馬用の馬具という性格づけができる。このように、飾り馬＝儀仗用と同時に乗馬・武装用の馬の役割の重要性が、最初から認識されていたのである。

そして、先の組み合わせの馬装具が普及しはじめた頃に、新しい形の楕円形の馬装具が受け入れられる。その時期は、ちょうど河内の古市古墳群での大型古墳の造営が終わり、淀川水系に継体大王の大阪・今城塚古墳が築かれる頃に重複するため、新王権による新たな外交ルートによってもたらされた馬具と理解する考え方もありそうだが、それらの製作地は前とかかわらず大加耶園が想定できる。このことに関連して、馬具の金具の形の違いに政治性が反映されるという解釈もあるだろうが、現状ではこの馬装具を採用した主体が特定できるわけではなく、また、剣菱形杏葉を主とする馬装具もこれと同時に継続して作られているため、その製作主体との関係についても合理的な解釈が必要となる。この点については、改めて検討の機会をもちたいと考えている。

小論は、慶尚大学校によって刊行された玉田古墳群の10冊に及ぶ報告書と、趙榮濟・柳昌煥両氏による同古墳群と大加耶園の馬具の変遷の論考に接したのをきっかけに、日本の馬装具との関わりについて再考したものである。まず、長年にわたってご好意をいただいている両先生に対して、深い敬意と謝意をここに表します。また、歴博での加耶文化の研究会とシンポジウムに参加の機会を与えていただいた白石太一郎氏の、長年にわたる学恩に心より感謝の意を表します。

同時に、次の方々からの助言と援助をいただいた。記して感謝します。

申敬徹 金斗喆 柳昌煥 成正鏞 張允禎（敬称略）

引用文献

- 穴沢啄光・馬目順一 1993 「陝川玉田出土の環頭大刀群の諸問題」『古文化談叢』30-上
 伊藤秋男 1979 「公州宋山里古墳出土の馬具」『百濟文化』12
 尹容鎮・金鐘徹 1979 『大伽耶古墳発掘調査報告書』高靈郡
 金鐘徹 1981 『高靈池山洞古墳群』啓明大学校博物館遺跡調査報告第1輯
 金斗喆 1993 「加耶の馬具」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社
 ——— 2000 「馬具를 통해 본 加耶와 百濟」『加耶와 百濟』第6回加耶史学術会議 金海市
 国立光州博物館 1984 『海南月松里造山古墳』光州博物館学術叢書第4輯
 国立晋州博物館 1987 『陝川礪溪堤古墳群』
 国立全州博物館 1994 『扶安竹幕洞祭祀遺跡』国立全州博物館学術調査報告第1輯
 小玉道明 1988 『井田川茶白山古墳』三重県教育委員会
 埼玉県教育委員会 1980 『稲荷山古墳』
 鈴木一有・齋藤香織 1996 「剣菱形杏葉出現の意義—伝岡崎出土資料をめぐる問題—」『三河考古』9
 成正鏞 2003 「百濟漢城期騎乘馬具の様相と起源」『第4回古代武器研究会発表要旨』古代武器研究会
 千賀久 1988 「古墳時代壺鍔の系譜と変遷—杓子形壺鍔を中心に—」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV
 ——— 1994 「日本の初期馬具と伽耶の馬具—5世紀後半の馬装具を中心に—」『伽耶および日本の古墳出土遺物の比較研究』国立歴史民俗博物館
 ——— 2003 「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学』Ⅲ同成社

-
- 趙榮濟 1988 『陝川玉田古墳群』Ⅰ慶尚大学校博物館から2003年のXまでの報告書
趙榮濟・柳昌煥 1998 「陝川玉田古墳群の馬具」(高久健二訳)『古文化談叢』40
長野県埋蔵文化財センター 1999 『榎田遺跡』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12
樋口隆康・西谷真治・小野山節 1959 『大谷古墳』
宮代栄一 1993 「5・6世紀における馬具の「セット」について」『九州考古学』71
森下章司・高橋克壽・吉井秀夫 1995 「鴨稻荷山古墳出土遺物の研究」『琵琶湖周辺の6世紀を探る』京都大学文
学部考古学研究室
李尚律 2001 「天安斗井里, 龍院里古墳群의 馬具」『韓国考古学報』43輯 韓国考古学会
李南奭 2000 『龍院里古墳群』公州大学校博物館
李白圭・李在煥・金東淑 2002 『鶴尾里古墳』慶北大学校博物館学術叢書28
柳昌煥 2000 「大伽耶圈馬具의 變化와 劃期」『韓國古代史와 考古學』

(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館)

(2003年7月1日受理, 2003年7月18日審査終了)

日本出土의 ‘非新羅系’ 馬裝具의 계보 大加耶圈의 馬具와의 비교를 중심으로

千賀久

일본의 고분에서 출토되는 裝飾馬用 馬裝具는, 그 계통의 차이에 의해 <新羅系>와 <非新羅系>로 크게 나뉘는데 그 주류가 되는 것이 後者의 특징을 가진 馬具이다. 그 분류기준은 한반도 5세기 후반 이후의 馬具 製作地가 다름을 나타내는 요소로서, 金斗謁氏가 제시한 것이며, <新羅系>馬具는 주로 高句麗와 新羅, 그리고 加耶 일부의 馬具에서 보여지고, <非新羅系>馬具는 주로 百濟와 加耶에 집중하는 경향이 있으므로 일본의 馬裝具 系譜를 알 때에도 유효한 분류라고 말할 수 있다.

本論에서는 이 중에서 <非新羅系>馬具를 예로 들어서, 우선, 일본출토의 f자형 鏡板이 달린 轡와 劍菱形杏葉의 유래지의 候補地인 大加耶圈의 馬裝具 변천 속에서, 同地域에서 馬具의 改造가 빈번히 행해졌다는 것에 주목했다. 그 중 많은 것은, <新羅系>·新羅製馬具에서 <非新羅系>로의 변환제작으로, 그 배경에는 百濟地域으로부터의 강한 영향이 생각되어지며, 특히 高句麗와의 싸움에서 百濟가 일시적으로 멸망당했던 5世紀 후반에는, 그 難을 피할 수 있었던 工人을 받아들인 것에 의한 大加耶圈의 工房變容을 상정했다. 또 劍菱形杏葉이 考案되었던 地域에 관해서는, 韓國에서의 百濟古墳의 實年代觀에 議論의 여지를 남겨두었지만, 百濟의 公州지역에서 f字形鏡板과 同時에 만들어졌을 可能性쪽이 강하다고 생각했다.

그리고, 日本列島에 전해진 f字形鏡板·劍菱形杏葉의 馬裝具는 百濟로부터 직접 온 것과, 百濟製品이 大加耶圈을 經由해서 온 경우, 또한 大加耶圈에서 模倣되어진 것들이 운반되어진 경우 등이 있을 수 있다고 상정할 수 있다. 또 6世紀 전반에는, 新羅의 心葉形鏡板·杏葉의 馬裝具가 大加耶圈에서 改造되어진 것이, 日本의 橢圓形의 裝飾馬具에 系譜적으로 연결된다고 생각했다.

이처럼 5世紀 후반부터 6世紀 전반경까지의 日本의 馬裝具 系譜는, 우선 百濟에서, 그 후는 大加耶圈에서 찾아 볼 수 있다. 이것은 당시의 韓半島정세속에서, 日本列島의 倭와 友好關係를 유지하고 있었던 地域을 아는데 있어서 有效한 資料가 된다.

A History of “Non-Silla-type” Horse Trappings Excavated in Japan: a Comparison with Horse Trappings of the Dae-Gaya Federation

CHIGA, Hisashi

Ornamental horse gear that has been excavated from burial mounds in Japan is broadly classified into one of two categories depending on differences in their origin. These relics are classified as either “Silla-type” or “non-Silla type”, with the majority possessing characteristics found in the latter category. The criteria for these categories are based on elements indicating differences in the regions where horse gear was made on the Korean Peninsula from the second half of the 5th century, which have been put forward by Mr. Kim Doo-Chul (金斗喆). Horse gear belonging to the “Silla-type” are thought to be those from Koguryo and Silla and some parts of Gaya, while “non-Silla type” horse gear tend to be concentrated in Paekche and Gaya. These categories are most useful when determining the origin of horse gear discovered in Japan.

This paper examines horse gear of the “non-Silla type”, by first paying particular attention to the frequent modifications that were made to horse gear in Dae-Gaya, which has been nominated as the likely place of origin of bridles with f-shaped cheek pieces and diamond-shaped horse accessories that have been excavated in Japan. Most of this gear has been remade into the “non-Silla type” after having originally been made as horse gear fitting the “Silla-type” category. It is believed that strong influences from the Paekche region were at play here. In particular, during the second half of the 5th century when Paekche was temporarily decimated in a war with Koguryo, it is believed that the influx of craftsmen into Dae-Gaya who were fleeing the troubles there transformed the craft. Although there is ongoing debate as to the age of Paekche burial mounds in Korea, it is considered highly likely that the diamond-shaped horse ornaments were made in the Kongju (公州) region of Paekche at the same time as the f-shaped cheek pieces were made.

It is assumed that the f-shaped cheek pieces and diamond-shaped accessories that were brought to the Japanese Archipelago were either brought directly from Paekche or, in the case of articles that were made in Paekche but came via Dae-Gaya, it was the imitations of these articles that were made in Dae-Gaya that were brought to Japan. It is also believed that horse gear such as heart-shaped bridles and ornaments made in Silla but modified in Dae-Gaya in the early part of the 6th century have historical links to Japanese horse gear

that is cylindrical in shape.

In this way, the origins of horse gear in Japan dating from the second half of the 5th century through to the early part of the 6th century are to be found first in Paekche, and then later in Dae-Gaya. These are most useful materials for learning about the regions that maintained friendly relations with the Japanese state of Wa amid the ever-changing state of affairs in the Korean Peninsular at that time.